

---

ひとつ

雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとつ

### 【コード】

N13200

### 【作者名】

雪

### 【あらすじ】

世界は二つの人種に分けられる。

一つは、一般と称される一般市民たち。一つは、独自の特別能力を使う部族たち。そしてさらに、部族は動物系統と自然系統との二つに区分されている。

互いに人の形はしていても異なる生物。それで区別はされても差別はなく、食物連鎖の中二つの人種は共存していた。

ただし、部族はそれぞれ独自の特別能力を十二分に活かし、一般との共存を図ってはいたのだが 一般には知られていない、秘密

も存在した。

## 二本の剣の男

賑やかな街。大きすぎず小さすぎず、旅人の自分にとって、物資調達には最適だ。と、耀ようは思った。

小柄な体に、無造作な紺色の短い髪。薄めの赤い瞳に、片目は黒い眼帯で覆われ、背中には小さめのリュック、腰には長剣と短剣が一本ずつ刺されている。引き締まっているとは言い難いその細い体に、短剣はともかく長剣は何とも不釣り合いだった。

耀が街によった大まかな理由は二つ。一つは腹ごしらえ。もう一つは剣を研いでもらうためだ。

長居する理由はない。なら剣を研いでもらっている間に腹ごしらえをするか。などと、立ち止まることなく耀が考えていたときだった。

「きゃーっ！」

突如、叫び声が辺りに木霊した。

ざわざわと人々がざわめきあい、人混みが作られていく。

餌にたかった蟻みたいだ、とどこか冷めた感想を抱きつつ、耀は足を止めて胸元にかけてあった首飾りを取った。皮の紐の先には、まるで発光しているかのように輝く薄い青色の鉱石。

青澄石セイテヨウセキ 絶滅寸前とされている稀有な石族によって作り出される、ただでさえ貴重な石族の宝石の中でも、最も稀少な宝石。

自分の体のどこからでも宝石を生み出せる石族でも、この青澄石はある条件が揃わないと生み出せないらしい。

これは耀の物ではない。訳あって預かっている物だ。これを返すため、この持ち主に再び会うため、耀はいつ終わるとも知れない旅を続けている。

ともかく、この青澄石は持ち主を指し示すかのように、持ち主に近づくと薄く光る。つまりはこの石が光れば、そこに耀の探している人がいるということ。

期待はしていない。だがこの騒ぎを逃す気にもならず、耀は人混みへと走った。

もしかしたら、という一心に足が軽くなる。例えこれで違ってもいつものこと。シヨックなどないが、ここですれ違っていたりなどしたら、それこそ一生ものの後悔となるだろう。

人混みを縫って、人とぶつかりながらも前へ前へと進んでいくと。

中心には、逞しい体格の男がいた。

こちらに背を向けていて顔は見えないが、背格好からするに耀とさほど変わらないだろう。腰に差している二本の長剣が印象的だった。二刀流か、ととつさに頭の隅を横切る思考。

その男の前には、二本の刀傷をつけられ、横たわっている犬の姿。口からだらんと舌を出して、確かめるまでもなく、死んでいた。

この男が殺したのは一目瞭然だが、何のためだと周りを見渡すと、男の後ろに小さな女の子が地面に座り込んでいた。小さく震えながら、瞳にうっすらと涙を浮かべている。

ほんのうっすり状況が読めた気がしたその時　　どんと、背を押された。

「う、わっ！」

後ろの野次馬がぶつかったのだろうと考える間もなく、耀の体のバランスは崩れる。

バランスをとろうと足を前に出すが、バランスは保たれず　　コケる、と覚悟したときだった。

固い地面の感触は耀を迎えず、代わりに柔らかく暖かい感触が耀を包んだ。

「……おい。何だお前」

肩を誰かに掴まれている感触に、耀は顔をあげた。

目の前には、深緑の髪に、明るい茶色い瞳をした強面の顔。それをさらに引き立たすかのように目尻の下に走った傷跡が目立つ。背丈も耀より頭一つ分ほど大きい。

相手の顔をしっかりと見たところで、耀ははっと自分が男に抱き留められていることに気づいた。

「放せ！」

乱暴に男の手を払う。

「つて。何すんだお前！」

「きゃあっ！」

男が耀につかみかかろうとした瞬間、女の叫び声がそれを止めるかのように響いた。

その女の声がした方向から、人々が小さな悲鳴をあげ散り散りに散っていく。

「おい！ 来たぞ！」

逃げるように去っていく人々の言葉の中に出たそんな言葉を、耀の耳が拾った。

「来た……？ 何が来たんだ？」

「ちつ。あいつだよ」

「あいつ？」

「おい旅人。忠告してやるよ。面倒をかけられたくねーなら、いや、旅を続けたかったら、早く逃げるんだな」

「……どういうことだ？」

「来るぜ。馬鹿がよ」

どういうことか問いただそうと口から言葉が出る前に、ぐいっと腕を引かれ、後ろに思い切り投げられた。

そのまま地面にぶつかるなんて無様な真似をするはずもなく、受け身をとって体勢を立て直す。

「お前……っ！」

「おい芳ほう！ そいつ連れてお前も隠れる！」

「お兄ちゃん……！」

高く弱々しい声が、耀の横で聞こえる。目をやると、先ほど男の後ろで地面に座り込み震えていた少女だった。

お兄ちゃん、ということとは兄弟だろうか。

「お兄ちゃんも行くろう！ お兄ちゃん」  
「芳！」

眉をつり上げて厳しい口調で言う男に、芳と呼ばれた少女はびくつと肩を震わし、ぐつと拳を握った。涙を拭い、その小さい手で耀の服を掴む。

「こつち。早く！」

「おい、どういうことだ」

訳が分からないままに、だが今にも泣きそうに耀の手を掴む少女の手を振り払う気にもなれず、耀は少女に引つ張られるがままに建物陰へと隠れた。

そんな耀と少女と入れ替わるように、二、三人の傭兵のような者達が男を囲む。

「まあたお前か。ええ？」

傭兵から遅れて、数人の使用人に囲まれた一人の男が姿を現した。高くない背に貧弱な体、きらびやかな装飾品が体のあちこちを輝かせている。

「誰なんだ、あいつ……？」

さつきから来る来ると人々が怯え逃げ出していった原因が、まさかあの貧弱そうな男なのだろうか。

「ここ一帯を仕切ってる領主なの。偉そうで、逆らったらすぐに死刑……」

「……………」

権力にものを言わせ人々を恐怖で支配しやりたい放題。典型的な馬鹿か。と耀はため息が出そうになった。

そんな状況に嫌々耐えている人々には同情せざるを得ないが、いかんせん自分は旅人。正義の勇者などではあるまいし一つの街に執着し手間取っている場合ではない。

耀の探しているあの人は、もっともこういうものを嫌っていた。

こんな居心地の悪い場所に耀が探しているあの人がいれば、あの人はすぐさま街を去るだろう。

ならば耀も用だけ済ませ早々に街を去ろうと、確かに決心した。

この街にあの人はいない。

「ああ！ ベイビー！」

領主は前に出るなり刀傷をつけられ倒れている犬に気づき、すぐさま駆け寄った。

恐る恐る犬を抱き上げ、よほど可愛がっていたのだらう、涙を流していた。

耀からしてみれば、人のいる前でそんな簡単に涙を流すなど言うてやりたいが。

「貴様……！ 何てことをしてくれた！」

「ああ？ 邪魔だったんだよ。その躰のなつてねえ下品な犬、てめえそっくりだな。ペットは飼い主に似るってのは、よく言ったもんだぜ」

「何をお！ お前、今度という今度はもう許さん！ おい、そいつを捕まえる！」

その領主の一言で、傭兵たちが二本の剣の男を捕まえる。

決して素早いとは言い難い傭兵の動きに、しかし二本の剣の男は抵抗なく捕まる。

「ふつ、利口なものいいが、精々これからの苦しみを楽しみにするんだな！ おい、ベイビーの死体を城まで運べ。丁重に埋葬するんだ。行くぞ！」

領主が先行してこちらに背を向けて歩き出すと傭兵もそれに従った。だがそれでも二本の剣の男は全く抵抗を見せることはなかった。「旅人さん！ お願い、お兄ちゃんを助けて！ このままじゃお兄ちゃんが殺されちゃう！」

二本の剣の男が傭兵たちに連れられ領主と共に消えると、少女がすがりつくかのように耀の服を掴み、そう訴えた。

「お願い！ 剣が使えるんだよね！？」

「……悪いが、深入りはしたくない。急いでるんだ」

「……っ！」



「それにあいつがああ領主の飼い犬を殺したんだろ。同情の余地はないな」

「違う、違うの！」

少女は大きな目に涙をため、首を大きく左右に振り、必死で否定を表した。

「あの犬、凄く凶暴で……。噛み殺された子もいるし、腕を噛みくだかれた人もいるの」

耀の頭の中に犬の死体が浮かぶ。確かに大きな犬ではあったが、それほど凶暴な犬を愛でているなど性格共々趣味まで領主は悪いらしい。

「それでっ、私が狙われて、私が凄く怖くて……。っ。立てなくて、動けないところを、お兄ちゃんが助けてくれたの！ ぎりぎりであとちよつと遅かったら、危なくてっ。殺したのは、仕方なかったの！ もしかしたら私が」

拙い言葉で、溢れてくる涙を拭いながら、必死に話していた少女はそこで言葉を止めた。

もしかしたら、少女の身が危険だった。犬と少女の体を比べれば、死さえあつたかもしれない。

確かにそういう理由なら、同情がないわけでもなかった。

抵抗しなかったのも、おそらく街の人々への迷惑を考えてではないだろうか。仮にも剣を携えているのだ。剣を抜きもせず敵わないと判断し、抵抗しなかったとは考えにくかった。

「……すまない。力にはなれない」

だがそんな少女の必死な叫びを聞いても、耀の心は動かなかった。少女の顔から生気が消える。

「薄情だと思ってくれて構わない。だが俺は、先を急いでふと胸元に触れる。自分の旅の目的である、青澄石に触れようとしたのだが、そこに、慣れた感触はなかった。

慌てて首もとから中を確認するがなく、立ち上がってポケットから始まり体の隅々を確認するがそれでもない。

今度は耀の顔から生気が消えた。

「旅人さん……？」

落としたのだろうか。だがどこに。あれは常に肌身離さなかった。いや、だが騒ぎが起こり確認しようと首から外した。そしてそれからずっと手に持っていた。首にはかけ直していない。だがその手を開いた覚えがない。あるとすれば。

そこで、耀ははっと思い出した。

野次馬にぶつかられたとき、バランスを崩してコケそうになった。可能性があるならその時しかない。

耀はすぐさま自分がコケそうになった辺りに走り、周りを必死に散策した。

周りに隠れそうな物はない、開けた場所。だからこそあの宝石の美しさは見落とすことなくすぐ見つかるだろうから、ないのがおかしい。

まさか逃げ出す人々に持って行かれたのだろうか。だがあの騒ぎようからして人々に下を気にして走る余裕があっただろうか。他の可能性は。

記憶を辿る耀の頭の中に、二本の剣の男に抱き留められた映像が浮かんだ。

まさかあの時！

「た、旅人さん……？ どうしたの？」

「……芳、と言ったか？」

「え、う、うん」

「前言撤回だ」

わずかな可能性でも確かめる。耀が旅をする目的を、最大の手がかりを無くしてなるものか。

「領主の城の場所を教えてください」

## 目指すもの

城というだけあって広く、ぐるりと周りを囲む塀は高かった。だがそんなもの耀にとっては何の障害にもならず、容易く塀を超えて城内に侵入する。

問題はここからだ。内部構造が分からないこの城の、どこを探せばいいのだろう。

捕らわれたというだけあって定石は地下牢などなのだろうが、ともかくにも場所が分からない。

下手にうるついで捕まるのは御免だ。いつそそのほうが早いかもしれないが。

城内の中に生えている木に身を潜め考えを巡らせていた耀だったが、やはりここは傭兵を一人捕まえるべきだろうという結論に至った。

丁度下を通りかかった傭兵目掛け飛び降り、葉のこすれあう音に反応して顔をあげた傭兵の首に足蹴した。

うつ伏せに倒れた傭兵の背に乗り、首もとに短剣を突きつける。

「少し協力してほしいんだが」

「ひ、ひいっ！」

「危害は加えたくない。大人しく言うことを聞け」

「は、はい！」

随分気の弱い奴に当たったものだ、耀はにやりと口端を上げた。

湿気った空気の立ち込める中、カビ臭さが鼻を突いた。

両腕は横に真っ直ぐ張られ、手首と肘に嵌められた頑丈な革製の手枷は、冷たい岩の壁に押し付けられるかのように腕をしっかり固定していた。足首には鋼鉄の足枷が嵌められ、ごつい鉄球と繋がれている。

「……っ」

頭が垂れていて、深緑の髪色しか伺えない。腰につけていた二本の剣は取り上げられ、代わりにとでもいうかように城に来るまでにはなかった真新しい傷や痣が体のあちこちに作られていた。

額から流れる血が目の側を伝い、口に流れ込んだ。口内に広がる鉄の味に、吐き出そうとして誤って飲み込んでしまう。

「うえ。まじい」

自重めいた笑みを浮かべそう呟いてみたが、周りの岩に吸い込まれるかのように溶けていっただけだった。

男 漸ぜんは、頭を上げた。

明るい茶色の瞳が、わずかにしか光の入らない暗い空間を見据える。

「っの野郎。好き放題やりやがって」

少し力を入れるだけで、あちこちから小さな悲鳴が上がる。

存分にやってやれという領主の言葉と共に漸を受け取った牢屋の看守役を務める傭兵は、まるで日頃のストレスを発散するかのよう  
に思う存分漸に暴行を加えた。

領主の飼犬を切った、あの広場で領主を切り捨てるとも出来た  
ただろうが、まだ幼い芳にそのような場面を見せたくはなかった。  
かといって芳の目の届かないこの城に着いた途端暴力に訴えれば、  
後々あの頭の足りない領主によって街の人々にかかる迷惑が想像に  
難くない。

だからと思つて大人しく捕まったのだが、誤ったかもしれないと、  
漸は視線を下に戻し息をはいた。

これぐらいの傷を負わされることも死刑も分かっていた。

だが、自尊心が許しそうにない。

「後で覚えてろよ」

死刑が決まっただけでも、死ぬ気はなかった。刀も奪われ、ここからどう逃げ切るかは謎ではあるが。

「余裕そうだな」

ふと、声が響いた。

自分以外にはいないだろうこの空間に響く、自分以外の声。

顔を上げると、そこには知った人物がいた。このような暗い場所では黒く見えないでもない紺色の髪に、綺麗な赤い瞳。何よりもう片方の目を覆っている眼帯は印象的だ。

あの時の旅人。

「何で……こんなところにいんだよ」

思わず目が見開く。だがそれは幻覚でも何でも無い、れっきとした現実だった。

旅人は片手に持っていた鍵を鍵穴に差し込んでいる。

「その鍵、どうした？」

「そこで溜まってた奴から奪った。弱すぎる」

「はっ……。領主も領主だからな」

「……そういってお前はどうか。見たところ、軽い怪我ではなさそうだな」

「俺は手え出してねーんだよ」

「別にどうでもいいが」

「勘違いすんなよ。弱いつて勘違いされんのが俺が一番嫌いなんだ。捕まった理由はどう解釈してくれてもいいけどな」

「街のためか」

「……何で知ってたんだ」

「そう考えるのが妥当だろ。お前の強さに興味はない」

「てつめえ！ やっぱ勘違いしてんだろ！？」

「お前と口論しに来たんじゃない。本題だ」

牢の中に入り、中腰の体勢で身を屈めた旅人の片目に射抜くよう

に見られ、その口調といい身にまとうただならぬ雰囲気といい、漸から言葉を奪うには十分だった。

「青澄石はどこにある」

疑問文ですらない、確信を持っているかのように旅人は問いかける。

「せいりようせき……？ 何のことだ？」

「……これぐらいの、丸くて青く輝いている宝石だ。知らないか？」

「宝石？」

それは自分と最も縁がない代物だった。

だが待て。そういえば。

「もしかして、紐が繋いであるやつか？」

「それだ！ どこにある！？」

「お、俺は持つてねえよ」

旅人はいきなり立ち上がり、今にも胸ぐらを掴まれそうな勢いで詰め寄られた。

小柄なくせに、身にまとう雰囲気は生半可なものではない。

「ならそれをどこで見た！？」

なぜそこまで必死なのだろうかと考えたが、宝石なので当たり前かとすぐに思い至った。

それに今はとてもではないがそんなことを聞ける雰囲気ではない。

「この城についたときだ。何でか、俺の刀に引っかけた。それを領主が目ざとく見つけやがって、そういや大興奮してたな。そんなすげーもんなのか？」

確かに美しい輝きは放っていたが、宝石などといった類に疎い自分にとって、その価値を判断するなど出来ようはずもない。

分かったものといえば、何の知識もない自分を魅力するほどの美しさを放っていたことだ。

価値は分からなかったが、これが偽物であるはずがない。そう漸を強く納得させるほどの存在感を、あの宝石は醸し出していた。

旅人は眉をひそめ、その脳裏には何を思っているのだろう、洗面

した顔つきには恐怖さえ覚えた。

一生の不覚だ、と耀はギリツと奥歯を噛み締める。

青澄石が見つかってよかったなどと呑気なことを言っている場合ではない。よりもよってあんな下劣な奴の手に渡るとは。

青澄石のあの美しい輝きが曇ってしまいそうで、一刻も早くこの手に取り戻したかった。

ただでさえあの最上級の美しさを持つ宝石は耀の手の内にあるべきではないのに。

一日でも早く、一秒でも早く、あの人の元に返すべきだ。あの輝きはあの人の元にあってこそさらに輝き、あの輝きはあの人にこそふさわしい。

あの美しさを汚してなるものか。輝かすことは出来ないが、耀の役目はそれを死守することである。

「……領主はどこだ」

眉根に力がこもるのが分かった。目も座っていることだろう。だが今自分がどんな表情をしていようが、そんなものどうでもいい。

「し、知らねえよ。部屋とかじゃねえのか？」

「……そうか。礼を言う」

「お、おい！ 待てよ！」

くるりと背を向け立ち去ろうとした耀だったが、慌てた声に足を止め、肩越しに振り返った。

「俺はこのままかよ」

「……………」

「助けに来てくれたんじゃないかねえのかつて聞いてんだっ

「……ああ」

忘れていた、と呟いて、耀は体の向きを変えた。

一歩踏み出しながら、鞘に手をかける。

「……おい。ちょっと待て」

「お前の妹にはここまで案内してもらったという恩があるからな  
「妹？」

「その恩に免じて助ける」

「ちょっと待て。妹って何だ？ 芳のことか？」

「ああ」

「芳は妹じゃねーよ」

「……お兄ちゃんと呼んでなかったか？」

「まあそう言っただけ、俺はこの街の住人じゃねえ。旅人だ」

「……」

「お前今びつくりしてるだろ」

思いがけない告白に耀の顔は瞬時固まった。

この男の行動の節々を思い出し、この街の住人だろうと勝手に決めつけていた。それを否定され驚いたが、それがどうしたのだろう。自分には関係ないではないかと思いついて、耀は努めて冷静に振る舞う。

「……意外だな。だがどっちにしろあの子の願いはお前を助けることだ。だから助ける」

「そりゃありがてーけど、ちょっと待て。他に方法探してくれ」

鞘から剣を抜いた耀に、男はわずかに顔色を悪くさせる。

「動くなよ」

男の言葉などまるで聞こえなかったかのように流し、耀はさらに一歩近づいた。

恐怖を表している男の顔など関係なく、耀の手によって剣はなびく。

「っ」



覚悟したかのように両目を固く瞑った男だったが、その体に外傷がつくことはなかった。ただ、はらりと腕を拘束していた革製の手枷が外れる。

「……き、切れてねえ」

「当たり前だろ。おい動くな。足が切れてもいいのか」

「あー、これは大丈夫だ。ありがとな」

「は？」

男はそう言うと、鋼鉄の足枷に手をかけた。何をするのかと思いきや、力を入れた手によってバキツという破壊音と共に壊れる鋼鉄の足枷。

まるで握りつぶしたかのようなその行為に、耀は大きく目を見開いた。

一方男は涼しい顔で、素手でさらに足枷を壊し、両足を拘束から解放した。

「ててつ。あー、力出ねえ」

体についた傷を確認している男に耀は言葉を発しなくなったが、言葉は発されることなく視線となった。

だがその怪物を見るかのような視線に、男は気づかない。

「……何だ、お前」

「俺？ 漸っっていうんだ」

「名前を聞いたんじゃない」

「あ？ じゃあ何だよ」

「……どこかの部族か？」

基本、部族は外見的統一部分がある。それは主に瞳の色で、稀に髪の色が、その部族特有の色を有している場合もある。

けれども一般でも似たような色をしている場合もあり、外見的判別は少々困難だ。

大概その独特の能力で証明するので、一般と部族が間違えられることはない。

だがその中の唯一の例外が、美しい宝石を生み出す、絶滅寸

前の石族である。

石族は、この世で石族しか持っていない黒髪と水のように綺麗に澄んだ水色の瞳の二つの外見の統一を持つ。

曖昧な部族ごとの外見の特徴の中、石族のそれだけは唯一絶対だった。

ただでさえ稀少な宝石を生み出す財力源なうえ、珍しい髪と瞳の色を持ち、今ではその存在を脅かされている石族は、金銭目的で狙われることも多いと聞く。

つまり、外見で判断出来るのは石族だけだということだ。

部族も種類が多い。石族のような絶対の外見の統一を持ってでもない限り、部族ごとの外見の特徴は覚えきれない。

「ちげーよ。俺は一般」

だから、こう確認しないと部族か一般かの確信は得られない。

緑の髪色と茶色の目。

どこかの部族がこういった色をしていたような気もしたが、その考えを男 漸の言葉は否定した。

部族ならあの怪力もすんなり納得出来たが、一般だということにどんな力なのだと、耀は心のどこかで感心した。

「そう言うお前は？ 部族か？」

そう問われ、耀は返事に窮した。

だが、先に相手に言わした手前もある。

「……ああ」

ここは礼儀に則り、耀は素直に答えた。

その際のどこか憂いた表情に、漸が気づいたことも知らずに。

「で、旅人さんよ。宝石を取り返しに行くのか？」

「ああ」

「やめとけ。たかが宝石の為だけに領主を怒らせたら、あの街の奴らが理不尽に苦しめられるんだぞ」

「……」

カチャ、と刀が鳴った。

「たかがだと？」  
低くなる耀の声。

その身に纏う雰囲気の豹変に、漸の顔が若干ひきつる。

「お前の物差しで俺を見るのはやめてもらおうか。お前にとってのたかがは俺の命だ。……死にたいか」

「……落ち着け。悪かった」

今にも剣を抜こうとする耀に、漸はため息をこらえて冷静な対処に徹した。

丸腰の漸にとっていざというときは不利な立場だったが、耀の言葉も本気であるということは伝わったが、不思議と漸に死への恐怖はなかった。

危機はいくつも乗り越えてきた旅で得た習性なのだろうか。

「けど考えてやってくれ。確かにあれはお前の物で、手放したくないのも分かるが」

「あれは俺のじゃない」

鞘からわずかに顔を出していた刀身を、耀は鞘に収めた。

「俺はあれを、返さなきゃいけないんだ」

眉根が寄る。

今耀には、自分がどんな顔をしているか確かめる術などなかった。だから分からなかった。無意識のうちに、顔が今にも泣きそうな表情を作っていたことに。

気づいたのはただ一人、そんな耀を目の前で見ている漸だけだった。

「……もしかして、お前……」

漸が、そつと口を開く。

「あれを返す為だけに、旅してんのか？」

漸自身、まさかと思っていた。それだけの為に、決して安全と云えない旅が出来るのかと。

漸も旅人だ。漸の場合、安住の地を求めて旅をした。生きやすい地を探していたのだ。自分が生きていく為に。

いくら耀が部族だといつても、好戦的な部族たちが存在するなか、人の為にいつ命を落とすか分からない旅をするなど、漸には信じられなかった。

だが耀は。

「だから何だ」

強く何の迷いもない瞳で漸の問いかけを否定した。

この旅の目的こそが全ての耀に、迷いなど微塵もなかった。

「後は一人で大丈夫だろ。俺の気が変わる前にどこかに行け」

耀はくるりと背を向け、今度こそ牢屋から出ようと格子に手をかけた。

「おい、待てよ」

そんな耀に後ろから声がかかるが、振り向く気もなく、耀は格子をくぐる。

「領主の部屋、案内してやるぜ」

耀の足を止めるのに、その一言は強力的だった。肩越しにちらりと、漸を振り返る。

「俺、こういう建物内で何がどこにあるのかっていう勘が鋭くてな。初めて来た場所でも大抵外さねえ。それに何より、この城の内部構造は大まかに頭に入ってる」

耀の後に続いて漸も牢屋の中から出てくる。

「俺の刀も多分そこだ。手を組んで悪くはねえと思うぜ？」

「………どうい風風の吹き回しだ。街の奴らに迷惑がかかるんじゃないのか？」

「ずっと頭に来てたんでな。どうせあいつに殺される気はねえ。逃げるなら、再起不能にぶっ潰してやる気になったんだよ」

「一瞬で、随分な変わりようだな」

「どーせお前が領主にぶつかる時点で街の奴らには被害が出るだろうからな。お前止まりそうにねーし、ならもう俺もぶつかってやるよ。それに」

漸は一旦言葉を切った。そしてニヤリと笑い、

「お前のことは気に入った」

面白そうに、どこか嬉しそうに、そう言った。

そんな漸に耀は体を向き直し、フツと笑う。

「恋愛感情ならお断りだ」

「気色悪いこと言うな。同志として、手を組もうつつたんだよ」

「同志ではないだろ」

「どっちでもいいーだろ。目的は同じなんだ」

「足手まといはいらない」

「弱くねえつつただろ！」

ふうつと息をはき、耀は漸をじつと見た。

確かに内部構造を知らないのは痛い。傭兵より漸のほうが信頼出来るのは確かで、何よりもっと迅速に事を運べるだろう。

漸の言葉をどれだけ信用出来るかは分からないが、漸の実力が耀の想像以下でない限り、痛手となる不利益はない。

「耀だ」

手を組むことに賛同の意を込めて、名乗ってなかった名を名乗る。

漸はニツと笑った。

起点は違えど目的を領主と同じくして、二人の旅人は手を組んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1320o/>

---

ひとつ

2010年12月29日10時25分発行